

ホーソン、ジェイムズ、そしてハウエルズ —ジェイムズの『ホーソン伝』をめぐって

武 田 千 枝 子

William Dean Howells と Henry James はほぼ半世紀にわたって互いに力となり、影響を与え合う間柄であった。彼らはそれぞれ作家としての相手の特質や特定の作品について論じた評論・書評を数多く残している。それらはいずれも 19 世紀の文人批評家の特徴をよく表わすもので、批評の対象である相手を論じながら、工まずして無意識のうちに評者自身の文学を、作家としての信条・姿勢を語るものとなっている。二人が共にニュージーランドの先輩作家 Nathaniel Hawthorne から多大の影響を受けていることはよく知られている。彼らのホーソン論はそれぞれの立場を鮮明に示すものとなっており、中でもジェイムズの *Hawthorne* (1879) と彼の見解に対する反論となったハウエルズの書評 (1880) はその代表的なものである。1870 年代から 80 年代初めにかけてのハウエルズとジェイムズは、ヨーロッパ生活を経験したのち、アメリカの作家として歩むべき方向の選択を迫られていた。そのような背景の中で行われた二人の論争の意味を改めて考えてみたい。

1879 年に英国のマクミラン社から出版されたヘンリー・ジェイムズの『ホーソン伝』⁽⁴⁾は、12 巻本の the 'English Men of Letters' series の中の一冊で、取り上げられた作家の中でホーソンだけがアメリカ人作家であるなら、その執筆者ジェイムズも唯一人のアメリカ人であった。そのよ

うな事情から、当時英国に滞在していたジェイムズがこの仕事にかけた意気込み・気負いは決して小さくはなかったであろうことは容易に想像できる。また Tony Tanner が指摘しているように⁽²⁾、当時の文壇において未だ確固たる地歩を確立していなかったジェイムズの立場を考慮すれば、気負いを感じない方がむしろ不自然である。伝記的事実については、執筆に当ってアメリカから取り寄せたホーソンの女婿 George Parsons Lathrop の *A Study of Hawthorne* (1876) に依存したものの、彼自身の言葉によるとそれは “a tolerably deliberate and meditated performance” (かなり慎重に想を練った仕事)⁽³⁾であった。

ジェイムズの気負いはこのような外的状況からのみ生じたわけではない。それよりもむしろ、ホーソンという同国人作家が彼にとっていかなる存在であったのか、ということと深く関わっていたようである。ジェイムズの自伝 *Notes of a Son and Brother* (1914) の中に、若き日におけるホーソン発見についての記述がある。⁽⁴⁾ジェイムズが 21 歳の時、ボストンの Ashburton Place に住む彼の許にホーソンの死 (1864 年 5 月 18 日) のニュースが届く。南北戦争終結前後の沸騰した熱っぽい空気の中で震えおののく国民の意識や 65 年春のリンカーン暗殺のニュースなどと溶け合っ
てジェイムズの心象風景の一部となっているこの出来事は、彼の意識に対する異常なまでの直撃であったと記されている。それはその何週間か前に彼がこの先輩作家についてある重要な発見を果たしていたからであった。

... the tone [with which “his work was all charged”] had been, in its beauty — for me at least — ever so appreciably American; which proved to what a use American matter could be put by an American hand: a consummation involving, it appeared, the happiest moral. For the moral was that *an American could be an artist, one of the finest, without “going outside” about it, as I liked to say....* [Italics mine] (HJ: *Autobiography*, 480)

ジェイムズのホーソン発見はこの引用文中の斜字体部分に示されているように、アメリカ人が修行のためにヨーロッパへ出向くことなく立派な芸術家になり得ることをホーソンが身を以って示したということであった。ホーソンの没年である1864年という年は、ジェイムズの作家としてのデビューの年でもあることを考慮に入れると、すでにヨーロッパを経験して、常にヨーロッパとの比較の上でアメリカを見る習慣を身につけていた当時のジェイムズにとって、ホーソンは一つの啓示ともいえる理想の芸術家像であった。したがってその後のジェイムズは、特に1870年代を通じて、いかにすればアメリカに留まったまま芸術家としての高みに登りつめることが可能であるかを考え続けることになる。

ところが、このような内外からの推進力を受けて書かれた『ホーソン伝』の冒頭に提示された主調音は、芸術の花が開くためには豊かな土壌が必要であるという、あまりにも有名になった「教訓」――

that the flower of art blooms only where the soil is deep, that it takes a great deal of history to produce a little literature, that it needs a complex social machinery to set a writer in motion ⁽⁵⁾

であった。決して“deep”とはいえないアメリカの、ニューイングランドの、そしてセイラムの土壌は芸術家の活動の場として不適當である。この矛盾した認識、即ちアメリカが生んだ偉大な芸術家としてのホーソン像と、そのホーソンを生んだアメリカの土壌に対する否定的な評価との間の食違いは何を意味するのであろうか。

ジェイムズの『ホーソン伝』は芸術家を育むには適さない土壌で創作活動に従事したホーソンの苦勞に共感を示しながら、彼自身の進む方向を示唆した書物である。そのような性格の書物として読むならば、その意味で示唆的な記述を選び出すことは比較的容易である。一例をあげよう。

It seems to me... that it was possibly a blessing for Hawthorne that he was not expansive and inquisitive, that he lived much to himself, and asked but little of his *milieu*. If he had been exacting and ambitious, if his appetite had been large and his knowledge various, he would probably have found the bounds of Salem intolerably narrow. (Hawthorne, 23)

ホーソンの性格に言及したこの箇所では、ジェイムズは彼の内向的性格・孤独癖と外部からの知的刺戟に乏しい生活環境とが彼にセイラムという限定された世界に対して疑問を抱かせずに済んだのであろうと判断する。それは翻って、幼年時代にすでにヨーロッパとは異なるアメリカを意識し、ヨーロッパからの最新情報の洗礼を受け、ヨーロッパとの再会を常に切望していたジェイムズ自身にとっては、書店で最新号の*Punch*誌のインクの香りを嗅ぐことのできるニューヨークですら限られた狭い世界であったということの意味している。ジェイムズはこの書物の中でアメリカを、ニューイングランドを、そしてセイラムを“provincial”と形容しているが、その意味では彼自身にとってのニューヨークもまた“provincial”以外のなものでもなかったのである。彼がある地域を“provincial”という時、それは文化の面で未成熟な社会を意味している。ジェイムズにとって成熟した社会とは、“a complex social machinery”を備えた社会である。そこには“State, in the European sense of the word,” “sovereign,” “court,” “personal loyalty,” “aristocracy,” “old country-house” (Hawthorne, 34)などの細目が高度な文化の指標として存在する。古い歴史を刻んだこれらの細目は、社会の組織の厚みと肌目の細かさを決定する要素である。とりわけ社会を観察・探求の場とする小説家にとってこのことは無視できない。それらは作品生成の過程において、ジェイムズの好む比喩を用いていえば、一枚の絵の構図を決定するのに必須のものなのである。1870年に発表された旅のスケッチ“Chester”においてジェイムズは幼年時代を古いものに囲まれて送ったヨーロッパの作家について次のように述べている。

We all know how in the retrospect of later moods the incidents of early youth “compose,” visibly, each as an individual picture, with a magic for which the greatest painters have no corresponding art. There is a vivid reflection of this magic in some of the early pages of Dickens's *Copperfield* and of George Eliot's *Mill on the Floss*, the writers having had the happiness of growing up among old, old things.⁽⁶⁾

上の引用文の中の“incidents”とは古い町を逍遙しているとふと出会う廃墟や行く手の地平線上に突き出た教会の尖塔など、風景の中の思いがけない出会いとして心に刻印されるもののことである。これら古い町の古いものの、“old, old things”がのちに作家の中で自ずから一枚の絵として構成されてしまう。それに対して“incidents”をもたないアメリカの風景の場合はどうなのか。ジェイムズはこれより先に、同じ1870年に発表した旅のスケッチ“Saratoga”において、このことに関連して次のように述べている。

There are no white villages gleaming in the distance, no spires of churches, no salient details. It is all green, lonely, and vacant. If you wish to enjoy a detail, you must stop beneath a cluster of pines and listen to the murmur of the softly-troubled air, or follow upward the scaly straightness of their trunks to where the afternoon light gives it a colour.

(The Art of Travel, 55)

細目を欠く空虚な風景においては絵の構図は浮かび上がってくることはない。眞実を伝える微細な粒子を、もしあるとすれば、捉えるために目を凝らし、耳を傾けなければならない。これはアメリカで創作を続ける者が宿命として背負わなければならない不利な条件である。ジェイムズのこうした思いは、Charles Eliot Norton に宛てた 1871 年 1 月 16 日付の手紙の中で

ホーソーン、ジェイムズ、そしてハウエルズ（武田）

述べられているアメリカの風景とアメリカの作家についての次の言葉へと集約されていく。

Looking about for myself, I conclude that the face of nature and civilization in this our country is to a certain point a very sufficient literary field. But it will yield its secrets only to a really grasping imagination.

(*HJ: Letters*, I , 252)

これらの記述から読み取ることのできるものは、1870年代初めのジェイムズの心はアメリカでの創作活動の可能性の探求とヨーロッパの作家に対する羨望との間で揺れていたということである。

ここで再び先に引いた『ホーソーン伝』からの一節について考えたい。

If he had been exacting and ambitious, if his appetite had been large and his knowledge various, he would probably have found the bounds of Salem intolerably narrow.

この仮定法の意味するところは、ホーソーンがジェイムズ自身のように野心的で強い欲求の持主であったなら、狭いセイラムの土地を飛び出していたかもしれない、ということである。飛び出していたらホーソーンの文学はどうなっていただろうか。ホーソーンについてジェイムズは次のようにも述べている。

If Hawthorne had been a young Englishman, or a young Frenchman of the same degree of genius, the same cast of mind, the same habits, his consciousness of the world around him would have been a very different affair; however obscure, however reserved his own personal life, his sense of the life of his fellow-mortals would have been almost infinitely more

various.

(Hawthorne, 34)

ここでもジェイズは、青年ホーソンの才能がイギリスあるいはフランスにおいてはまた違う形で花開いたであろうと思わずにはいられないのである。（ホーソンの渡欧は活動の最盛期を過ぎた 1853 年のことであった。）この評伝を執筆しながらジェイズが絶えず考えていたことは、あるいはなっていたかもしれないホーソンの姿、ひいては彼自身がヨーロッパを活動の場として選択したらどうなるであろうという思いであった筈である。そして彼は “The Jolly Corner” (1908) の Spencer Brydon のように、ヨーロッパで創作活動に従事する自分の分身に会いたい、いつかは会えると思いつけたであろう。この書をジェイズによる彼自身のヨーロッパ選択の正当化のための書とみなしているトニー・タナー (Tanner, 8) の解釈は的確なものと言わざるを得ない。ジェイズは 1875 年にヨーロッパ永住を決意してアメリカを離れるが、1880 年代初めに両親の相次ぐ死に遭遇し、アメリカとの絆を断ち切ることに躊躇を感じるものがなくなった。この間、揺れる心に一つの方向を与えるために『ホーソン伝』の執筆は彼にとってまたとない機会であったと言える。

ジェイズにとって『ホーソン伝』の執筆には、自己の分身との出会いの願望に加えてもう一つの力が働いていたと考えられる。それは揺れ動く心がヨーロッパを選択するという態度決定を遅らせるのではないかということに対する恐れである。ジェイズはホーソンの *French and Italian Note-Books* についての無署名の書評を 1872 年という早い時期に発表している。⁽⁷⁾ホーソンについてのジェイズの初めてのこの書評における関心は専らヨーロッパの風物に対するホーソンの反応の仕方にある。

Excessively detached Mr. Hawthorne remains, from the first, from Continental life, touching it throughout mistrustfully, shrinkingly, and at the rare points at which he had, for the time, unlearned his national-

ホーソーン, ジェイムズ, そしてハウエルズ (武田)

ity.....

He walks about bending a puzzled, ineffective gaze at things, full of a mild, genial desire to apprehend and penetrate, but with the light wings of his fancy just touching the surface of the massive consistency of fact about him, and with an air of good-humored confession that he is too simply an idle Yankee *flâneur* to conclude on such matters.

(*The American Essays of HJ*, 5-6)

当時, ジェイムズにとってイタリアはとりわけ美に対する渴望を満たしてくれる, 充実した生を生きることのできる土地であった。“The Madonna of the Future” (1873) 及びそれ以前のごく初期の短編, そして最初の長編 *Roderick Hudson* (1876) の舞台としてイタリアを選んだジェイムズには, ホーソーンの影響は控え目で, 対象との間に距離を置くものと映ったのである。性格的にイタリアが性に合わなかったということのほかに, 晩年にいたっての渡欧ということが変動しつつある社会に対する順応性を奪ったとジェイムズはみているのである。

Toward the end of his life, we believe, his cheerfulness gave way; but was not this in some degree owing to a final sense of the inability of his fancy to grope with fact?— fact having then grown rather portentous and overshadowing.

(*The American Essays of HJ*, 6)

そしてこの書評は次のように結ばれている。

Exposed late in life to European influences, Mr. Hawthorne was but superficially affected by them — far less so than would be the case with a mind of the same temper growing up among us today. We seem to see him strolling through churches and galleries as the last pure American—

attesting by his shy responses to dark canvas and cold marble his loyalty to a simpler and less encumbered civilization.

(*The American Essays of HJ*, 11)

ホーソンのヨーロッパとの接触が晩年の経験であった点が彼を表面的かつ内気な観察者にとどめ、それによって彼が「最後の純粋なアメリカ人」であることが浮き彫りにされたと評者は結論する。ジェイムズに言わせれば、ヨーロッパの風物を前にして表面的かつ内気な観察者であることはまったく無意味である。彼にとっては観察することによって無数の印象を取り込む経験は、現実に身を投じて行動することと等価値の人生体験にほかならなかったからである。

ジェイムズはホーソンの『滞仏・伊日誌』の頁から浮かび上がってくるこの先輩作家と同じ道は歩まないことを予感していたのではないか。手遅れにならない時期に決意すべきだという教訓を彼はホーソンから得たと言えよう。タナーが70年代におけるジェイムズとヨーロッパとの関わりについて重要視しているのは、ジェイムズがバルザックやサッカリイのような偉大なリアリストと同様に具体的な社会の細部を描く小説家になることを真剣に考えていたという点である。⁽⁸⁾ そうであるとするならば、ジェイムズが1886年に発表した「ハウエルズ論」の中で、「アメリカのバルザック」となることを期待していたこの友人について述べた次の言葉

... it may be considered that the happiest thing that could have been invented on Mr. Howells's behalf was his residence in Venice *at the most sensitive and responsive period of life...* [*Italics mine*]⁽⁹⁾

は『ホーソン伝』執筆当時のジェイムズの考え方を反映したものということになる。感受性の最も鋭敏な時期にヨーロッパを経験することが望ましいということは、ハウエルズの場合によっても証明されるということである。

ホーソーン、ジェイムズ、そしてハウエルズ（武田）

ある。ジェイムズのヨーロッパ選択という問題には、彼の文学の屋台骨ともいうべき「自己の分身との対面願望」と「手遅れの悲劇」の二つが織り込まれていたと考えられる。

『ホーソーン伝』に込められていたと考えられるジェイムズの思いは、当時の英米の読者・評者には正確に理解されなかった。出版後の波紋の大きさはジェイムズにとって不可解とも思えるほどであった。彼が Thomas Sergeant Perry に宛てた 1880 年 2 月 22 日付の書簡にはアメリカの父親から伝えられてくる凄まじい反響に言及した箇所がある。

The hubbub produced by my poor little *Hawthorne* is most ridiculous; my father has sent me a great many notices, each one more abusive & more abject than the others. The vulgarity, ignorance, rabid vanity & general idiocy of them all is truly incredible. But I hold it a great piece of good fortune to have stirred up such a clatter. The whole episode projects a lurid light upon the state of American 'culture', & furnishes me with a hundred wonderful examples, where, before, I had only more or less vague impressions. Whatever might have been my own evidence for calling American taste 'provincial', my successors at least will have no excuse for not doing it.

(HJ: Letters, II, 274)

この書物に対する抗議の中心はアメリカの土壌を形容する“provincial”という語が頻繁に用いられている点である。ジェイムズは「そこからこれまでうすうす感じていたアメリカの文化の状況がはっきり見える」と述べている。

ハウエルズの書評“James's Hawthorne”はこういう状況の中で *The Atlantic Monthly* の 1880 年 2 月号に掲載された。⁽¹⁰⁾ Albert Mordell が述べているように⁽¹¹⁾、ハウエルズは「ジェイムズを首尾一貫して讚美した最初の批評家の一人」であった。『ホーソーン伝』とほぼ同じ時期に同じように

大きな反響を呼んだ“Daisy Miller”（1878）についてハウエルズは1879年から1902年までの間に、3編の書評と1通の書簡によって、世間からはアメリカ娘に対する冒瀆として非難されたこの作品を一貫して擁護したのである。ところが『ホーソーン伝』に対するハウエルズはむしろ正面から反論しているのである。尤もハウエルズは取り上げる作家や作品の良い面は卒直に認めるタイプの批評家であったから、『ホーソーン伝』の場合も、相手の立場を、イギリス人に向けてアメリカの作家を論じる微妙な立場を思いやる言葉や、評価すべき点は卒直に評価する姿勢は明らかにみとれる。しかし、ハウエルズが反論した点はジェームズ自身もその多用を認めている“provincial”という語の妥当性であった。

If it is not provincial for an Englishman to be English, or a Frenchman French, then it is not so for an American to be American....

(Discovery of a Genius, 92)

ハウエルズはアメリカだけが“provincial”なのではない、それぞれの国の人間がその地域性を体現しているならば、アメリカ人もまた同じであると主張する。さらにジェームズの所謂底の浅い、細部をもたぬ社会に対しては次のように自説を主張する。

After leaving out all those novelistic ‘properties,’ as sovereigns, courts, aristocracy, gentry, castles, cottages, cathedrals, abbeys, universities, museums, political class, Epsoms, and Ascots, by the absence of which Mr. James suggests our poverty to the English conception, we have the whole of human life remaining, and a social structure presenting the only fresh and novel opportunities left to fiction, opportunities manifold and inexhaustible.

(Discovery of a Genius, 96)

たとえ細部を欠いていても、多様で尽きることのない人間の生活そのものをアメリカに見出すハウエルズを、ジェイムズは「議論を避けるもの」として非難する。長い引用となるが、1880年1月31日付の書簡によるジェイムズの反論を以下に引く。

I think it is extremely provincial for a Russian to be very Russian, a Portuguese very Portuguese; for the simple reason that certain national types are essentially and intrinsically provincial. I sympathize even less with your protest against the idea that it takes an old civilization to set a novelist in motion — a proposition that seems to me so true as to be a truism. It is on manners, customs, usages, habits, forms, upon all these things matured and established, that a novelist lives — they are the very stuff his work is made of; and in saying that in the absence of those “dreary and worn-out paraphernalia” which I enumerate as being wanting in American society, “we have simply the whole of human life left,” you beg (to my sense) the question. (HJ: *Letters*, II, 267)

ジェイムズの目にはハウエルズもまた粗野で偏狭なアメリカ社会そのものであり、“provincial”な存在と映った。それまでのハウエルズの援助と協力を考えれば、これはまさにあからさまな敵対行為と思われたのであろう。ジェイムズはハウエルズの偏狭な考えを拒否せずにはいられなかった。このことがジェイムズをヨーロッパへ向わせる決定的な弾みとなったと言っても過言ではない。ハウエルズは何はなくともアメリカには小説家に提供できる人間の生活があると断言する。1870年代の終りには漸くヨーロッパの引力から解放されてアメリカへの回帰を始めたハウエルズであった。彼は1880年代に入ると、70年代に試みた国際状況の小説を離れてアメリカ社会の諸相を描く方向に転じた。彼の反論にはアメリカを描く作家としての決意がこめられているとみるべきである。そうであるならば、こ

こには二人のアメリカの作家の東と西へ向けての新たな出発が予示されていたことになる。

『ホーソン伝』をめぐって明らかになったジェームズとハウエルズの考え方の相違は、すでに1872年に両者が書いたホーソンの『滞仏・伊日誌』の書評にうかがわれる。ジェームズの書評についてはすでに言及したが、ハウエルズのそれは*The Atlantic Monthly*の5月号に“Passages from the French and Italian Note-Books of Nathaniel Hawthorne”と題して無署名で掲載されたものである。⁽¹²⁾ジェームズがイタリアにおける晩年のホーソンの姿にそうはなりたくない自分の思いを託したのとは異なり、ハウエルズはイタリアでみじめな思いをした自己を語るホーソンの卒直な語り口を喜ぶのである。ここに描かれているのは“the picture of our whole race in that land [Italy]”⁽¹³⁾であると述べるハウエルズは、手に余るイタリアの迫力に戸惑うホーソンの姿は、彼一人の限界を示すものではないとみる。評者ハウエルズは敬愛するホーソン⁽¹⁴⁾に限りなく暖かい共感を抱きながら筆を進めているのである。

注

* 本稿は平成9年11月8日、日本ナサニエル・ホーソン協会東京支部談話会における発表「ヘンリー・ジェームズの『ホーソン伝』とウィリアム・ディーン・ハウエルズ」をもとに、稿を一部改めたものである。

- (1) 米国版はその翌年、1880年にHarper and Brothers社から出版された。
- (2) “Considering how little James had actually written at that time (1878) it is rather remarkable that he should have been invited to contribute to what was a distinguished series, namely *English Men of Letters*. (*Hawthorne by Henry James*, with Introduction and Notes by Tony Tanner (London: Macmillan, 1967), p. 3.)
- (3) “Letter to William Dean Howells (dated Jan. 31 [1880]), in Leon Edel, ed., *Henry James: Letters* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Pr., 1975), II, 266-267.
- (4) *Henry James: Autobiography*, ed. F.W. Dupee (New York: Criterion Books, 1956), pp. 477-480.
- (5) Henry James, *Hawthorne* (Ithaca, N.Y.: Cornell Univ. Pr., 1956), p. 2.

ホーソーン, ジェイムズ, そしてハウエルズ (武田)

- (6) Henry James, "Chester," in *The Art of Travel by Henry James*, ed. Morton Dauwen Zabel (New York: Anchor Books, 1962), pp. 93-94.
- (7) "Hawthorne's French and Italian Journals," *Nation*, 14 Mar. 1872. Reprinted in *The American Essays of Henry James*, ed. Leon Edel (New York: Vintage, 1956).
- (8) See *Hawthorne by Henry James*, p. 14.
- (9) "William Dean Howells," *The American Essays of Henry James*, p. 147. First appeared in *Harper's Weekly*, June 19, 1886.
- (10) Reprinted in *Discovery of a Genius*, ed. Albert Mordell (New York: Twayne Publishers, 1961).
- (11) Preface in *Discovery of a Genius*, p. 7.
- (12) Reprinted in *W.D. Howells: Selected Literary Criticism* (Bloomington: Indiana Univ. Pr., 1993), I, 197-200.
- (13) *W. D. Howells: Selected Literary Criticism*, p. 200.
- (14) ハウエルズとホーソーンの関係については、『学習院大学文学部研究年報』第39輯 (1992) 所収の拙論「ハウエルズとホーソーン」参照。

(英米文学科 教授)